

まちづくりミーティング開催結果概要



開催テーマ 若者・子育て世代がいきいきと暮らすまちづくり

参加者

NPO法人 キッズバレイ13名
桐生市長

傍聴者4名
報道機関4名

日時：令和4年6月15日（水）午後4時から5時20分
場所：ココトモ（東武桐生ビル1階）

1 開会

2 あいさつ

3 議題

若者・子育て世代がいきいきと暮らすまちづくり

意見交換のポイント

- 子育てや暮らしに関するキッズバレイの主な取組と今後の展望
（①GROWCATION ・ ②グリーンケア ・ ③官民連携による支援体制）
- 若者・子育て世代がいきいきと暮らしていくために桐生市と共創したいこと 等

4 閉会

子どもたちに誇れる 地域の未来をつくる



団体概要

理念	子どもたちに誇れる地域の未来をつくる
ビジョン	若者・子育て世代がいきいきと暮らし、働くことのできる地域
ミッション	きかけをつくる つながりをつくる 新しい視点をつくる
キッズバレイWAY	現場に向き、体感する 学び、探究し、自分ごとにする 出会いを歓迎する 一人ひとりの違いを強みにする 対立よりも協働を選択する 情熱を傾けられることを大切に 夢を語り、未来を描く 新たなチャレンジを応援し合う
設立	2013年11月
人数	理事3名 監事1名 職員23名



キッズバレイについて
わたしたちは「子どもたちに誇れる地域の未来をつくる」を活動理念として、若者・子育て世代が抱える困りごとや気持ちがあくまで軽くできるような、ゆるやかにつながる共生社会を目指して、活動を行っている。

キッズバレイの取組で共通しているのは、負のサイクルから良いサイクルへと転換できるような、オープンで参加しやすい場と機会を作ることである。限られた関係性の中での生活から、ゆるやかなつながりがある生活にすることで、色々な人とつながり、生活が楽しくなり、自分が誰かの役に立つことが喜びになる。そうしたプラスに働くサイクルに転換していきたいと考え、取り組んでいる。

オープンで参加しやすい場と機会については、「きかけをつくる」、「つながりをつくる」、「新しい視点をつくる」の3つのポイントを意識しながら、「子どもたち」「暮らし」「仕事」の3つの領域において取り組んでいる。

子どもたち

子どもたちがいきいきと暮らすことができ、様々な個性や価値観が受け入れられる地域にしたい。主な取組は、群馬大学の学生と連携した無料学習支援「スタディミーツ」や地域の方に先生になってもらい、体験活動等を行う「きりゅうアプタースクール」である。

今後については、防災に関する取組で、避難した子どもたちが日常に近い環境を過ごせるような仕組みを検討したいと考えている。

暮らし

子どもを産むということは奇跡的な出来事であるにも関わらず、産後うつや育児ノイローゼに陥ってしまう問題がある。また、一人親世帯や祖父母と暮らす子供などの家族環境の問題なども周囲の環境や社会を変えていくことで、なくしていきたい。

そうした考えの下、女性専用の女性に寄り添う相談支援や子どもすこやかホットライン、NPPプログラム、キノピオランドの運営などを行っている。また、一昨年からグリーンケアの取組を開始するなど、悩みや不安、心の揺れに寄り添う事業を展開している。

このほか、桐生を自慢し、プレゼントしたくなるコンセプトで始めたカタログギフト「桐生物語」のリニューアルを企画している。

コワーキング

コワーキングスペースの運営をはじめとして、地方だからこそできる多様な働き方が可能な地域を目指したい。

起業支援やスモールビジネスの立ち上げのサポートを行っている。昨年には起業家教育として、子どもたちの手で社会課題を解決するソーシャルインパクトチャレンジを開始しており、つながり図書館「エブリホン」という名称で、集めた古本を譲っていく取組の中で寄附金を集め、その寄附金でシネクラブの協力の下、子どもたちが映画のテーマを決めた上映会を実施した。このほか、桐生が岡公園の自動販売機の事業を開始した。レッサーパンダ舎がオープンしたところなので、関連グッズを入れているが、今後はこの場所の思い出を持って帰ってもらえるようなものや、まちなかへの周遊に繋がるような新たな展開も考えていきたいと考えている。



ABOUT

GROWCATIONってどんな旅？

地域のプロが先生となって
五感を使った遊びで、新しい感性を解放！

約100分
体験・見学



① GROWCATION



WORK
+
GROW
+
VACATION

グローケーションとは

大人は安心して働きながら、子どもには好奇心を育むプログラムを通して心も体もひとまわり成長できる体験を提供するものであり、令和3年度から実施している。

【グローケーションの4つの特徴】

1. いつも通りの仕事環境をご用意
大人に関しては、コトモを拠点「MT」環境があるので、ストレスなく仕事ができる環境を整えている。
2. 小さい子は保育士が付き添い
保育士や教員資格のあるスタッフもおり、安心して預けられる環境を作っている。
3. その道のプロ市民先生から学ぶ
桐生市内で活躍されるプロの市民先生と地域で活動して学ぶことができる。
4. 親子の記憶をもっと豊かに
思い出の残る旅になる親子プログラムを用意し、親子で桐生を楽しむ時間を過ごしている。

桐生ならではの体験を中心にプログラムを立てており先日の実施では、群馬大学と連携し、織物記念館で桐生の生地を使用したフアッションショーや手ぬぐい工場の見学などを実施した。参加した保護者からも安心して過ごすことができたとの感想ももらった。

ワーケーション事業の今後の展開 1. 滞在される方の宿泊、交通手段に 対する施策の充実

宿泊施設については、長期滞在を視野にアパートやマンションの活用を検討したい。また、交通に関しては、移動の際にちょうど良いバスがなかったので、レンタカーやタクシーとの連携でクリアできるか検討したい。

2. 保育園・幼稚園等の桐生の日常の 体験

ワーケーション需要を取り込めるよう、グローケーションの設置日だけでなく子どもを預けられる仕組みとして、保育園や幼稚園等で子どもを預かり、桐生市の日常が体験できると良いのではないかと考える。都内から見て群馬県は程よい距離にあり、広い園庭や泥んこ遊び、あるいは自然の中をただ散歩するだけでも魅力に感じてもらえる。そうした体験を通して、移住に繋がることが期待できる。

このほか、他の自治体で取り組んでいる教育留学や保育園留学の事例も参考にしながら桐生市と市と連携した取り組みができないか考えていきたい。

参加者の感想を聞くと、桐生市は都内からの距離がちょうどよく、コンパクトな街で良い。レンタカーの運転ができなくても徒歩である程度の移動ができるといった声が多かった。ワーケーションができる場所を探している方に響くような取組に展開してきた。



(市長)

行事やイベントに促われがちであるが、キッズバレイの取組は、理念、ビジョン(目的)、戦略、戦術のフロアがあり、一つの大きな括りの中で整合性がしっかりと図られているので、素晴らしいと思う。

私も市長として、毎日毎日、大小の様々な決断を行うことがあるが、先のことだけに促われないよう、理念、目的、戦略、戦術のフロアを作って対応することとしている。

グローバル化の取組は、色々な立場や関係の方々とのゆるやかなネットワークができていくことで、同時多発的なつながりが大きな幹になり、うねりになっていくような、そんなイメージを持った。

桐生市には様々な活動を行う団体がたくさんあるので、そうした団体との連携を更に図っていただきたい。また、行政は行政の役割を果たすために、皆様の取組を把握・理解、共有し、必要な支援等を行うことで効果を高めていくことができると思うので、よろしく願いたい。

交通の課題の意見があったが、今年度の組織改革で交通ビジョン推進室というセクションを設置した。今後になるが、おりひめバスを補完する仕組みとして、群馬大学が研究を進める次世代モビリティの活用などを取り入れていきたいと考えているので、そうしたものも連携できるようにすると良い。本日の意見も踏まえ、官民連携の取組に繋げていければよいと思うので、よろしく願いたい。



グリーフとは
日本語で「悲嘆」の意味であり、一般的には大切な人を亡くしたときに用いられるが、モノや体の一部分などを失った場合も含まれ、喪失に伴う心理的・身体的反応のことである。

大切な人を亡くしてしまうと、社会とのつながりが絶たれてしまうことがある。

ありのままの自分の気持ちココロの言葉「一言の葉」を大切に、かなしみの中にいる誰もが自分を責めたり、一人で抱え込もうとしないよう、同じ境遇を抱える方向士がつながれる場づくり等のサポートを行っている。

グリーフの反応については、一人ひとり異なるが、日本では、死別後の四十九日等の法要が落ち着いた概ね半年頃から強く出現し、1年程度から最も強く感じるものとされており、例えば、配偶者を亡くした場合は、自分らしく生活できるようにするには、平均で4年半かかるとされている。

大切な人を亡くした方にかける言葉について、悩まれる方もいると思う。勇気づけるつもりでも、かえって傷つけてしまう場合もあるので、「何かあったら話してね。」と声をかけたり、言葉がなければ、一緒に泣く方が良い。

「グリーフケア」が身近にある地域を目指して

1. 行政窓口でグリーフに携わる方のグリーフケアの周知
2. お子さんを亡くされた方の声の反映
学校の提出書類等で毎年春になると、家族構成を記載する書類があり、考えることが辛く、傷つくという声がある。配慮した対応を検討していく必要があると考える。
3. 流産や死産を経験した女性等への心理社会的支援等
死産は年間2万人、女性の7人に一人は流産した経験があるとされ、口には出さないが辛い気持ちを抱えている方はたくさんいる。病院でも配慮した対応ができるようにしていく必要があると考える。

また、桐生市のケースではなかったが、流産となり、死亡届を提出した後に検診の知らせを受け取ったケースを伺ったので、こうしたことのないように取り組んでほしい。

グリーフケアという言葉が桐生市から群馬県に広げたい。

グリーフは他人事ではなく、誰にでも起こり得ることである。みんながグリーフケアという言葉を知り、病院や介護事業者、行政、民生委員など、様々な関係者や関係機関、地域がゆるやかに繋がっていることで、大切な方を亡くした方が相談できる場所があることを知り、案内できるような地域にしていきたい。

テーマ3：官民連携による支援体制について



電話・SNS・来所・訪問
による相談件数
278件

キノピーランド利用者との相談件数
R3年度93件

子どもすこやかホットラインによる相談



キノピーランド

キノピーランドは屋内遊技場であることから、暑い日や悪天候の際にも利用できること、好評の声をもらっている。ここでは、子育て支援員のスタッフが相談も設置されており、桐生市保健福祉会館に設置されていることから、子育て支援センターとも連携した迅速な対応ができています。コロナの影響で開館があまりできなかったが、今後もPRしていきたい。

お母さん同士のつながり
NP (Nobody, Perfect) プログラム (完璧な親なんていない) は年3回、お母さんの子育てを助けるプログラムとして実施しており、少人数のグループで日頃話せない悩みを話し、その悩みを解決するプログラムも併せて実施している。お母さん同士がつながる環境としているため、悩みごとの共有を図ることができている。
また、NPプログラムでは、お子さんを託児し、お母さんは2時間の間は一人の女性として参加する仕組みであるため、お母さんは子どもと少し離れられることで肩の荷が少し下りると喜ばれている。
市外・県外から来る利用者もいるので、この取組をPRしていきたい。また、思春期の子を持つ母親も集まれる場があると良いと考える。

連携実績による今後の支援体制
行政の手続きとキッズパレイの相談対応をそれぞれの役割で、双方方向でやり取りできたことは非常に良かったと考えている。支援機関同士の信頼関係の構築は重要であり、それぞれの取組を共有していく必要がある。ゆるやかなつながりの中で、どこにいても助けられる人がいるようにしていくことが非常に重要である。

女性に寄り添う相談支援
コロナ禍において、非正規雇用の多い女性が解雇され、経済的困窮に陥ったケースや在宅時間が増えたことに伴うDV、幼児虐待など、様々な相談が寄せられている。また、相談者は一つのことだけでなく、複合的な悩みを抱えているケースが多い。
本取組で最も重要なポイントは、問題の要因を本人に見つけてもらうことである。その伴走支援として、キッズパレイでは心に寄り添い、ゆとり話をして、安心して居場所を提供している。

若者・子育て世代がいまいきいきと暮らしていくために 桐生市と共創したいこと 等



教育環境について

幼児教育・学校教育において、昔ながらの慣習が変わっておらず、先生が絶対的な環境のままで、子どもの良さである自己肯定感を薄くしてしまっているのではないかと感じる。
このため、自己肯定感を育てる教育が必要ではないかと感じる。

桐生市にはオルタナティブスクールや通信制の教育も行う「わせがく高等学校」もでき、今後、旧桐生女子高校の跡地には角川ドワンゴ学園によるN校が来ることが予定されている。
地域に密着し、町の人と繋がりが、学校にこだわらずに、子どもたちが豊かに学んでいける選択肢を当たり前のようになり、みんなが知っていて、声掛けができたり、自分に合う環境を選べるようになると良いと考える。
そうした中で、公立学校もそうした社会変化も踏まえ、変わっていくべきだと考える。

(市長)

先日、オルタナティブスクールの関係者に、学校生活が楽しくない子どもや、悩んでしまっている子どもが、学びの場を提供したいという思いで開校したとの主旨の話を伺った。
自分の子どもは唯一無二であるということを踏まえ、教育委員会は教育委員会、オルタナティブスクールはオルタナティブスクールということではなく、助けあえられるような仕組みづくりは重要であると思う。



(市長)
お話をいただいた相談支援等に関しては、改めて民間と行政、支援者同士の情報共有、連携は不可欠であると感じた。

グリーンケアについても、知識を持つことはもちろんのことであるが、どのような対応を行うと良いのか意見交換が必要だと思う。マニュアルどおりの対応だけでなく、相手の気持ちに立った対応の仕方など、関係部署と共有を深めてもらいたい。

また、先程の説明のあった死亡届を提出した後の検診の知らせのケースをはじめ、こうした事例から改善に結び付けることが重要である。行政は行政で良しと思って実施しているが、皆さんの意見をもらい、連携することで、より制度の向上を図ることができるとがあると思うので、気づいたことがあれば教えてほしい。

私が市長就任時に掲げた公約において、子どもたちによる仮想のまちづくりを行う「ミニきりゅう」というイベントを開始した。

まちづくりに当たっては、子ども会議という会議の場で物事を決めていくこととしており、子どもたちの斬新な発想がどんどん出てきて非常に面白い。また、「ミニきりゅう」が終わった後の話を聞くと、子どもたちの成長も感じられるので、子どもたちという観点から是非参加してほしい。

本日の意見交換をまた一つのきっかけとして、こうした場でも、担当同士の会話でもフラットに何わせてもらいながら深めていき、ゆるやかなネットワーク作りにつながると良いと思う。市役所内でもしっかりと調整・連携を図り、本日の意見を参考に反映できるものを反映していきたいと思うので、引き続きよろしくお願ひしたい。